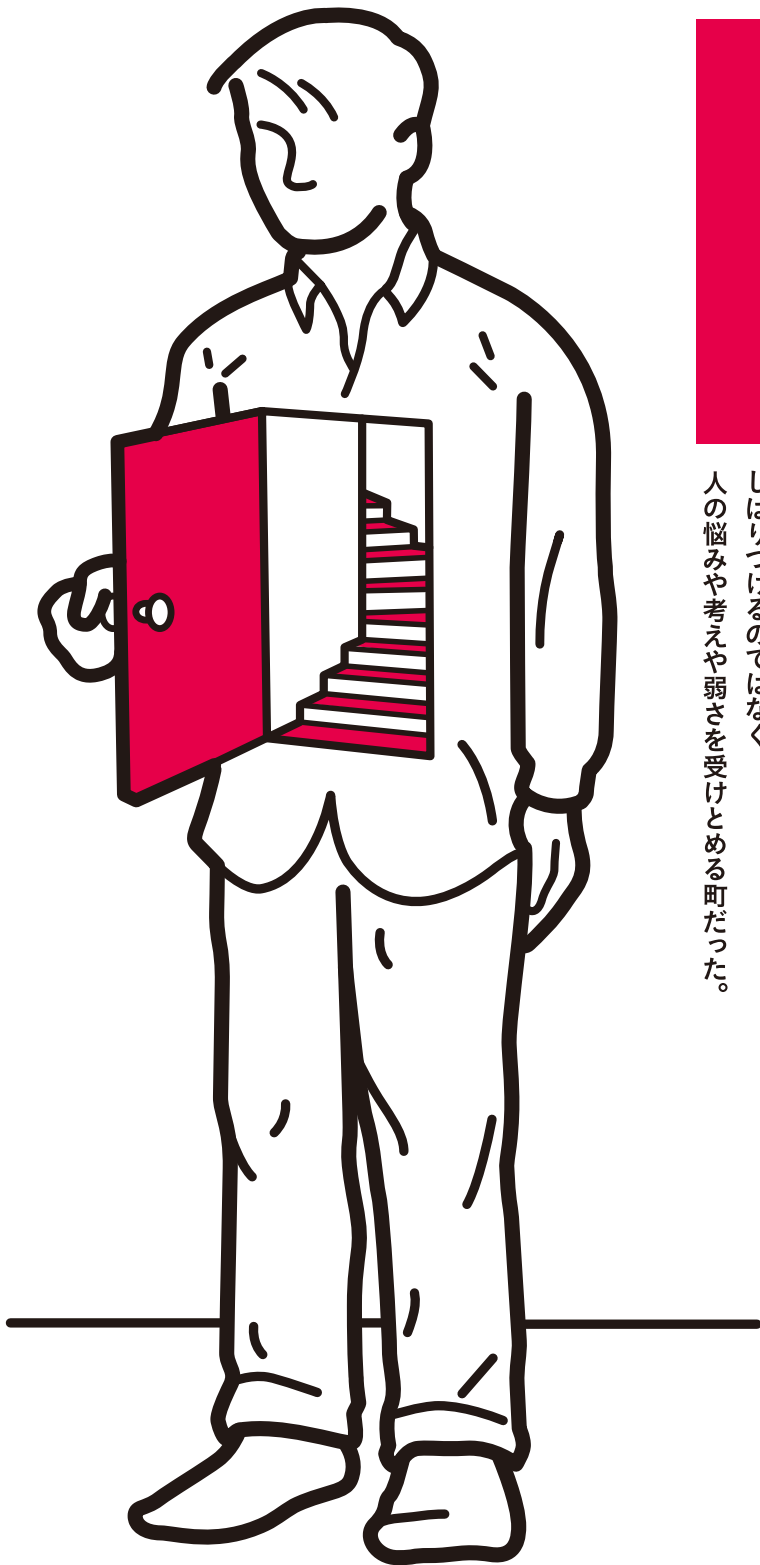


「病は市に出せ」

日本の自殺者は、年間二万人を超える。その原因は、「病気」「経済的」悩みが多いというが、では、悩みを自殺という行動に追い詰めるものは何か。岡檀さんは、日本で最も自殺の少ない町、徳島県の南端にある小さな町、海部町(※1)を調査して、著書『生き心地の良い町』(※2)で「コミュニティにあることを明らかにしてくれた。自殺の少ない町の「絆」は、人と人を一つの倫理観でしばりつけるのではなく、人の悩みや考えや弱さを受けとめる町だった。



里見喜久夫(イラスト編集部)=インタビュー
interview by Kikuo Satomi
河野 豊=写真
photograph by Yutaka Kohno

赤い羽根募金の集まらない町

「コミュニティのあり方から、「自殺」を読み解くとは、とてもユニークな研究ですね。どんなきっかけで、このテーマを思いつかれたのですか。

この海部町の調査の前に、戦争被害者の聞き取り調査をやっていたときですね。

戦争中と同じような被害にあつても、過去を引きずって心が癒えない人と、つらい記憶は残つていても心の整理がついている人とは、分かれることに気がつきました。それは、戦後をどういうところで暮らしてきたかで違っていました。「過去を知られたら生きていけない」という思いの中で過す町と、「そうか、大変な目にあつたんだね、つらかったね」と言つて、みんなで共有してくれるコミュニティとの違いです。コミュニティの規範が、人を助けることもあるが、逆に人々を苦しめることもあると思ひ知らされました。

「周りに話せなければ、うちにこもっていく。」

そのコミュニティと自殺が結びついたのは、『自殺つて言えなかった』(※3)という本との出会いです。自殺で親を失った子どもたちの話ですが、かつてない強い衝撃を受けました。

交通遺児の支援で有名な「あしなが育英会」が出版した本ですが、ここは自殺の遺児も支援しています。お父さんが交通事故で亡くなったつて言っても、自殺だったとは言えない子が多い。親を失うというだけでも大変な喪失なのに、その後も重いものを背負い続けているんだとはじめて知つて、それまでわたしは自殺のことをほとんどわかつていなかつたんだと思ひました。

一人の強い「絆」は、必ずしも、人を救うとは限らない。人を追い詰めることがある。そこから、自殺の少ない町、海部町の調査に入られた。

自殺の原因の調査や自殺が多いところの研究はたくさんあるけれど、自殺が少ないコミュニティの研究には手が付けられていなかった。誰もやらないというところは、研究者の常識からいうと、それだけ究明が難しいからやらないんですが、わたしの指導教授は興味を

示してくれて、心置きなく取り組みることができました。

確かに、存在することは証明できても、ないことを立証するのは難しいですね。これはいける、との手ごたえはどの段階でつかみましたか。

海部町では、赤い羽根募金が集まらないって知つたときですね。近隣の町では同じ額の募金がきっちり集まるのに、この町だけは集まらない。協力しない人もいるし、その理由を尋ねると、「だいたい赤い羽根で、どこへ行って何に使われとんじえ」と問い詰められて、すでに多くの人が募金をしましたよと言つてみても、「あん人らはあん人。いくらでも好きに募金すりゃええが。わたしは嫌や」とはねつけられる。自分の納得しないままには、空気に流されるようなことをしない。海部町ではどういふことが平気なんだつていうことから、これは見つけたような気がしましたよね。

「逆にとらなかつたのですか。この人は、社会への関心が薄いんじゃないか」「コミュニティ意識がないんじゃないか、と…。」

赤い羽根募金を拒む同じ人が、祭りの神輿を修繕しなくちゃいけないという、大枚を出す。何もかも拒絶しているのではなく、納得したらするというのもあつたので、これは単なる個人主義じゃないなつて気がしました。

なるほど。募金をしなくても、足並みをそろえなくても、白い目で見られることがない。その風土に着目されたのですね。それは、どこから生まれたのでしょうか。

海部町は江戸時代、材木の集積地として栄え、一攫千金を夢見て移住者が集まりました。さまざまな価値観を持った人が集まつて、なんとか、いっしょに暮らしていく知恵を育ててきたんじゃないでしょうか。

押しつけは、「野暮やろ」

「多様性を受け入れるコミュニティが成立していた。海部町は、大きくなり過ぎるのを是としないところがあります。」